

編集後記：本欄から昔の「天気」を取り出すと、大会告示の号に、日本気象学会講演予稿用紙が綴じ込まれていました。当時の講演申込の多くは、この予稿用紙を使い郵送で行っていたのです。まだ手書きが主流だった頃、提出用の清書の前には下書きを推敲していたはずなのに、完成版を読み返して重大な間違いを発見し、あわてて書き直したことが何度かありました（綴じ込みは2枚だったので、まずは未使用の予稿用紙を確保することから始めねば……）。

ワープロの普及に伴い、用紙に直接プリントするか、出力を切り取って貼り付けるとかの工夫がみられるようになりましたが、いずれにしても書式を合わせるのが難しかったと記憶しています。時代が進み、講演申込に予稿用紙が必須で無くなると、「天気」への用紙の綴じ込みも行われなくなりました。今はオンライン申込が主流で、大会予稿原稿のための推奨テンプレートファイルも提供されています。大会の度にページが増えていた予稿集は、PDF化で厚さを感じなくなり、カラーも可能と使いやすくなりました（端末環境が貧弱だと、ファイルの重さを感じるが……）。

ところで、「天気」の綴じ込みとして、これまで1月号と7月号には原稿を投稿する際の「送り状」が付いていました。少し厚い紙でミシン目が入っており、経費削減等の観点から、今年の7月号には載せておりません。来年からは1月号のみの掲載として、他のページと同じ紙、ミシン目無しになります。必要な方はコピーしてお使いください。「天気」PDFの公開で冊子体配布を希望されない学会員も増えています。「送り状」のエクセルとPDFのファイルは「天気」ウェブページからもダウンロード可能です。また、天気編集委員会では論文等の電子投稿システムでの受付を試行しています。編集作業の負担軽減にもなりますので、「送り状」が不要となる電子投稿もご検討ください。

さて、上記の電子媒体化を推進する流れの文章とは矛盾するようですが、私自身が論文等を精読する際は、紙に印刷して赤ペンを手にしてしまうことが多いのです。これは、タブレットとスタイラスペンが発展途上のデバイスということなのか、それとも私が時代の流れに取り残されているだけのことなのか……。

（城岡竜一）